

# 瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT  
2010.2. VOL.11

contents

極 研究&教育  
Current topics in research and education

人 時の人  
People in the news

楽 学生生活  
Campus life

技 最新医療の紹介  
Latest developments on the medical front

和 お知らせ  
Information

祝

## 名古屋市立大学病院 平成22年度初期研修プログラムでフルマッチ(定員獲得)達成しました!

非常に多くの皆様のご協力によって、はじめてフルマッチ(定員獲得)達成いたしました。長年の多大なる努力の結果であり、ご協力いただきましたすべての皆様のお名前をあげることは出来ませんが、ここに、名古屋市立大学病院総合研修センターから心からお礼を申し上げます。もちろん、名古屋市立大学病院のプログラムを選択してくれた学生諸君にも感謝します。80大学病院中、13大学病院のみが達成したことは今後も大きな自信になるでしょう。

平成16年度からの初期臨床研修義務化に伴い、当院でもFD(Faculty Development)を積極的に実施し、指導医の養成を行うとともに、研修のプログラム化を行い若手医師の育成に力を入れてきました。さらに、平成21年度からは、システム強化のため、新しく総合研修センターが設立されました。総合研修センターは、研修医の募集・採用、研修のプログラムの作成のみならず、総合診療・救急医療の研修から大学病院の特色ある専門研修まで、幅広い研修がスムーズになるような環境作りを行っています。また、大学病院以外にも、連携関連病院のネットワークを活かし、初期研修のみならず、後期研修を含めた医師としてのキャリアパスの形成、すなわち長期研修シ

テムの確立をすすめています。その最大の目的が、名古屋市立大学病院の「質の良い医療人の育成」という理念に基づくものです。

大学病院よりも一般大規模病院、地方よりも都市部ということで、一般病院での診療科偏在(診療科再編成のため)に加えて、一気に医師不足が地方の中小病院で露見しました。名古屋市立大学病院においても、都市の中での偏在にさらされ、研修医や後期研修医(シニアレジデント)を集める意味で、大変苦労していることは、皆様の多くが聞き及ぶところではないかと思えます。しかし、マッチングの意義を考えると、「研修医マッチング(組み合わせ決定)とは、医師免許を得て臨床研修を受けようとする者(研修希望者)と、臨床研修を行う病院(研修病院)の研修プログラムとを研修希望者及び研修病院の希望を踏まえて、一定の規則(アルゴリズム)に従って、コンピュータにより組み合わせを決定するシステムである」ので、大学病院だから何でも出来るということだけではなく、魅力あるプログラムや研修環境を整える様に、そして、それが多くの学生に伝えられるような工夫がなされる必要があるということです。研修医といえば、労働力にすぎないと思っていた過去の時代から、今では研修医が



総合研修センター／総合内科  
右から 総合内科部長 大原先生、総合研修センター長(副院長)山田先生、  
総合内科副部長(総合研修センター副センター長)兼松先生、筆者森田

それなりの数がいると言うことが、明らかな病院のステータスであり、病院のレベルを意味するような段階になってきました。今回のフルマッチは、先日の週刊ダイヤモンド(2009年8/12・22合併号)で愛知県内でトップ評価だったように、大きく名古屋市立大学病院が認められたということでもあります。

お時間がありましたら、名古屋市立大学病院総合研修センターホームページをご覧ください。  
(<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/kensyu-c.dir/index.html>)

また、病院4階に総合研修センターをオープンいたしました。春以降は、毎日夕方に、学生諸君、初期研修医(どの病院でも)の皆様、さらにはシニアレジデントで将来の診療科を迷ったり、やはり名市大やその関連病院で働きたい・研修したいという医師の皆様のため、専任事務担当(笹岡さん、井上さん)がお待ちしております。

総合研修センター 副センター長  
森田 明理(もりた あきみち)

## “瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

## 連携病院

### 連携病院 — 地域医療を担う拠点・中核病院

#### 大同病院 — Q:病院の特色は?

大同病院は昭和14年に大同特殊鋼(株)によって設立された病院です。様々な社会の変革、大規模自然災害などがありましたが、「地域の人々が必要とする医療をあまねく提供する」との信念で、危機を乗り越え現在に至っています。昭和60年からはさらに広く地域医療に貢献するため、医療法人となっています。現在は臨床研修病院、DPC対象病院、病院機能評価取得、診療情報・画像のIT化、救急センターの設置などをすすめ、救急・急性期医療を担う地域の中核的病院として活動しています。さらに「医療の価値」を高めるため、医療安全を第一とし、医療の質の向上、チーム医療の推進、地域医療機関との連携、市民医療者のパートナーシップの推進などに重点をおいて活動をしています。名古屋市立大学からは、多くの研修医・指導医が当院で活躍しています。

大同病院 院長 吉川 公章



#### 中日病院 — Q:病院の特色は?



中日病院は中日新聞社の健康保険組合が経営する病院で、名古屋城から約1km南のオフィス街に位置しています。当病院は2006年11月に、免震及び耐震構造の病院として新築移転しました。当病院の特徴は、都市型病院として外来診療が一日平均約400人と比較的多く、さらに人間ドックなどの予防医学にも重点を置き、特に健診センターは一日最高150人と愛知県でも有数の受診者を受け入れているところです。入院病棟は一般病床として42床を急性期や慢性期の治療に使用し、別のフロアを医療療養病床として51床を長期療養に使用しています。また手術室は2室あり、一般外科だけでなく当院の整形外科の特徴である「手の外科」の手術も多く行なわれています。医療機器としては1.5テスラーのMRI装置、64列のマルチスライスCT装置、CAD付のマンモグラフィー装置などを揃え、出来るだけ高品質の医療を提供することを目標としています。名古屋市立大学からは、白木茂博副院長はじめ6人の先生方に来ていただいています。

中日病院 院長 池田 信男

## 教育

### 「医療系学部連携チームによる地域参加型学習」がスタートしました



平成21年度GP大学教育推進プログラム「医療系学部連携チームによる地域参加型学習」が始動しました。これは医・薬・看護学部の学生チームが、地域の人々とのふれあいを通じて各地域のニーズの抽出と「学生なればこそできる」課題の解決に取り組む企画です。昨年の11月5日に協力を頂く地域の病院に対する説明会を、また12月12日には各地域の地域参加型学習協力委員33名と医・薬・看護学部1年生の代表60名によるキックオフシンポジウムを開催し、地域毎のグループに分かれて活動計画を話し合いました。プログラムの運営のために、医・薬・看護学部教員による医療系学部連携教育委員会(Allied Medical Education Committee, AMEC)が毎週水曜朝に会合を持ち、また病院外来棟4階に設置した地域参加型学習支援センターが学生の地域活動をサポートしています。現在、医・薬・看護学部1年生24チームが、名古屋、尾張、知多、東三河、足助、上矢作、三重県北勢地区の協力病院診療圏と豊根村、篠島、日間賀島、そして大学周辺の学区連絡協議会、桜山および瑞穂通商店街振興会、小・中・高等学校、社会福祉協議会、精神保健福祉センターで調査活動を行っています。学生たちの関心は地域医療や福祉ばかりでなく、背後にある地域の歴史や文化、産業にも広がり、また学生の参加によって地域の人々の間に新しいコミュニケーションが生まれつつあります。この企画は、H22年度から医・薬・看護学部の正規教養教育カリキュラムとなり、現在の1年生が新1年生チームを支援します。HPも開設しましたのでご覧ください。【 <http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/amec/> 】

医療系学部連携教育委員会(早野 順一郎、浅井 清文、木村 和哲、大原 弘隆、飯塚 成志、鈴木 匡、前田 徹、明石 恵子)





Atsushi Anakawa

**荒川 敦志**(あらかわ あつし) 産科婦人科学(病院准教授)  
 専門:婦人科腫瘍学

産科婦人科学の中でも悪性腫瘍を対象とした臨床や研究を中心に活動してきました。実臨床では診断、手術、化学療法、治療後のフォローアップまで全経過において診療を行っています。研究は主に臨床研究ですが、多くは化学療法に関連するテーマを扱っています。婦人科悪性腫瘍の中にも様々な疾患や病態があるため、それらすべての治療法が明確になっているわけではなく、まだまだ分からないことが多い分野です。われわれのグループではいくつかの全国的または地方の多施設共同研究などに参加しています。また関連施設との共同臨床試験も行い、小回りの効く研究も行ってきました。今後もより良い治療法の確立を目指して努力していきたいと思えます。

近年の論文: Eur J Obstet Gynecol Reprod Biol. 140: 67-70, (2008.)  
 Gynecol Oncol. 102: 542-545, (2006.)

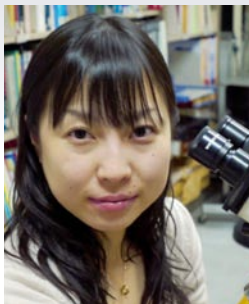


Yuki Ito

**伊藤 由起**(いとう ゆき) 環境保健学(助教)  
 専門:環境保健学

環境中に存在する化学物質の中には、フィブレート系抗高脂血症薬同様、ペルオキシゾーム増殖剤活性化受容体 $\alpha$ (PPAR $\alpha$ )のアゴニストになるものが多数存在しています。PPAR $\alpha$ はヒトとげっ歯類の間に機能差があることが知られており、私たちはヒトのPPAR $\alpha$ を有するトランスジェニックマウスを用いてこのような化学物質の毒性リスク評価を行っています。現在主に焦点をあてているのは、塩ビ製のプラスチックの可塑剤であるフタル酸エステル類やディーゼル排気ガス中のナノ粒子曝露による肝毒性、生殖毒性です。私達の研究結果が各国の化学物質のリスク評価や管理に関する施策に反映され人々の健康が守られるよう、日々頑張っていきたいと思っています。

近年の論文 J Occup Health 51:391-403(2009) & 51:478-87(2009), Toxicology 265:27-33(2009),  
 Toxicol Lett 191:103-8(2009), Toxicol Sci 111:19-26(2009), Inhal Toxicol 21:803-11(2009)



Aya Naiki

**内木 綾**(ないき あや) 実験病態病理学(助教)  
 専門:実験病態病理

私たちの研究室では、がん化のメカニズムやがんの予防に関し、モデル動物を用いることで得られた形態学および分子学的な知見をヒトに応用する研究を主に行っています。私は主に肝発がんについて研究を進めており、これまでの肝特異的にギャップ結合が阻害されたトランスジェニックラットモデルを用いた研究では、ギャップ結合を介した細胞間連絡能が肝毒性や発がん感受性に大きく関与することがわかりました。現在は、肝における傷害細胞からのがん化のメカニズムと細胞間連絡能の関与について解析しており、ヒトの肝炎から発生する肝がんの予防法確立へ役立てればと考えています。

近年の論文: Toxicol Pathol (in press), Pathol Int 9:790-796 (2009),  
 Carcinogenesis 29:1134-1138 (2008), Cancer Res 67:11353-11358 (2007)



モハメド先生

**Mohamed Hamed Hussein** (Cairo, Egypt)  
 Pediatrics and Neonatology, Lecturer and postdoctoral researcher.

Message: The more a scientist proceeds in his or her research and explorations the more he or she knows how great the creation is. I made my aim of studies to help exploring this greatness and for the advance of mankind. Special thanks to my supervisors and colleagues.

(モハメド先生は名市大小児科と藤田保健衛生大学小児外科、橋本俊教授のもとでの留学生生活を終え間もなくエジプトに戻られます。産婦人科医である奥様のガーダ先生も名市大でPhDを取得されました。)

近年の論文: Free Radical Research. 2010 (in press). Ped Surg. Int. Pediatr Surg Int. 2009  
 Oct 3 (in press), Shock, 2007; 28:154-159. etc

## OB訪問

### 中川 隆 教授—愛知医科大学 救命救急科・高度救命救急センター 教授

学生時代に麻酔科に興味を持ち、麻酔科(青地 修教授(当時))入局後は麻酔と集中治療中心の毎日でしたが、名市大救急部開設が私の転機でした。3次救急医療を目指し勝屋弘忠部長(当時)とともに院内の各診療科、部門との調整に奔走したことが懐かしく思い出されます。当時は救急救命士制度が発足間もないころで、救急医療体制が大きな変革を遂げ始めた時期でもありました。救急医療に従事するにつれ、一層の経験を深めたい思いで愛知医大高度救命救急センター(野口 宏教授(当時))の門を叩きました。平成14年に愛知医大でドクターヘリが運用開始となり、現在も搭乗医師として従事しています。わが国の医療諸問題のなかでも救急医療は深刻な状況にあります。今後は一医療機関の枠にとらわれることなく、地域挙げての救急医療体制作りを目指すべきだと思います。そのために個々の医療機関の得意な領域はどんどん発展させ役割分担を明確にし、相互の連携を図ることが現実的と考えます。その基盤となるのはリアルタイムの情報共有であり、医療機関同士はもとより消防機関も加えたネットワークが必須です。また一般市民に24時間いつでも適切な情報を提供できるシステムが必要で、これらを有機的に運用する実証実験が目下愛知県でモデル事業として展開されています。愛知医大としても名市大病院はじめ近隣医療機関との人的交流や人材育成を軸に緊密な連携を図りながら救急医療をさらに充実させたいと切に願っています。今後とも皆様方のご支援を賜りたく、宜しくお願ひ申し上げます。



中川 隆 教授

略歴:昭和53年卒業後、麻酔科入局。名古屋第二赤十字病院集中治療部、トロント大学麻酔科留学を経て、平成5年 名市大病院救急部開設に関わり、救急部専従。平成12年4月 愛知医大へ異動し、平成21年10月 愛知医科大学救命救急科教授ならびに高度救命救急センター長となる。

### 今井田 克己 教授—香川大学医学部 病理病態・生態防御医学講座 腫瘍病理学 教授

2001年9月に香川医科大学(現 香川大学医学部)第一病理学に赴任して8年ほど経ちました。私がこちらに赴任してから旧香川大学と合併し、まず総合大学となり、さらにその半年後には国立大学の法人化の波にさらされ、現在の正式な名称が「国立大学法人 香川大学医学部 病理病態・生態防御医学講座 腫瘍病理学」と移り変わりました。典型的な地方国立大学の変遷をじかに体験し、国立大学の単科医科大学から総合大学へ、さらに法人化への変遷は想像以上で、まさに「激変」ということがぴったりです。落ち着くまでにかなりの時間とそのための労力が必要でした。そんな中、研究面では、赴任後すぐに名市大から継続して化学発がんを中心とした研究を開始し、肺がんに関しての実験的研究を中心に進めてきました。また、食品添加物を中心とした食の安全・安心をテーマとした研究も展開しています。幸いにして、この研究に興味を持つ教員に恵まれて、順調に研究が進行していると思います。研究の一方で、大学の病理学教室として、医学部学生への病理学の教育の他、診断病理学の業務と若手医師の指導に関しても力をそそぎ、教室の軸の両輪として遂行しています。社会的貢献面では、食品安全委員会、経済産業省、総務省などの国の専門委員として、主として毒性病理学的な専門的経験を基盤に、国民への社会的貢献にも寄与しているつもりです。今後も、香川から世界に向けての新しい研究成果の発信と病理学的な専門医の育成に力をそそぎ、研究面でも、教育面でも精一杯がんばりたいと思っています。



今井田 克己 教授

略歴:昭和54年名市大卒。昭和58年同大学院医学研究科終了(病理学第一講座)。昭和58年同病理学第一講座助手、昭和63年国立衛生試験所(現 国立医薬品食品衛生研究所)病理部室長、平成3年名市大病理学第一講座講師、7年名古屋市厚生院部長、9年名古屋市東市民病院部長、11年名市大病理学第一講座助教授を経て、平成13年9月香川医科大学医学部病理学第一講座 教授。平成15年より香川大学医学部 病理病態・生態防御医学講座 腫瘍病理学 教授。海外留学:アメリカMichigan Cancer Foundation

## おめでとう

### M6 山田貴博さん—日本学生支援機構 平成21年度 優秀学生顕彰学術部門 大賞受賞!

このたび、日本学生支援機構 平成21年度 優秀学生顕彰事業において、学術部門で大賞を受賞致しました。受賞の対象となりました研究テーマは「膀胱上皮における尿意センサーの候補遺伝子同定」です。M2の時、抄読会がきっかけで機能組織学教室に通うようになり、鶴川先生をはじめ多くの先生方の指導のもと、今日まで継続して研究活動を行って参りました。受賞に際しては様々な方から温かいお言葉を頂き、いかに恵まれた環境で研究をさせてもらっていたのかを実感致しました。

この顕彰事業は学術部門の他に、文化・芸術、スポーツ、社会貢献の分野があります。昨年末に行われた表彰式では、スポーツ部門で受賞したオリンピック選手たちをはじめ、実に多彩な学生と歓談することができ、彼・彼女らの各分野での活躍もさることながら、その人柄に大きな感銘を受けました。その一方、全国の大学生の取り組みを知りえたことで、名市大の学友がいかに意識の高い活動を学内外の多方面で行っているかを改めて認識し、会場で誇らしくも思いました。

卒業後は初期臨床研修を経て、基礎医学研究の道へ進もうと考えております。多くの先生方にご指導・ご助言を頂きながら今日まで研究活動を行えたことが、私の学生生活における何よりの宝です。今後とも引き続きご指導の程、よろしくお願ひ申し上げます。



M6 山田 貴博さん



### 学部学生生活

## カンボジアアンコール小児病院チャリティイベントを学生が行いました—11月2日



一般の市民の方、他大学の学生などたくさんの来場者がありました。



赤尾美和看護師の現地の様子。

### 企画・運営の中心、M5 福島 一彰さんにききました

11月2日に、カンボジアにあるアンコール小児病院に長年看護師として勤めていらっしゃる赤尾和美さんにお越しいただき、講演会を行いました。

講演会は、まず、カンボジアの国の様子や歴史について、スタッフから発表を行い、その後、赤尾さんに小児病院での実際の活動について発表をしていただきました。

今回のイベントを企画したのは、「カンボジアにある小児病院が経済的に苦しく、HIVに感染した子供の治療を行うためのプログラムが継続できない。」という状況のあるNPO団体のメーリングリストで知り、何か支援をしたいと考えたのがきっかけです。講演会を開催するにあたって、自分が所属している大学のサークルや、他大学の学生、社会人など多くの方々スタッフが集まってくれました。平成22年3月にも赤尾さんをお呼びしてイベントを開くことになりました。

次は、僕ではなく、他のスタッフメンバーが中心となってイベントを運営します。今後も継続的にこのアンコール小児病院を支えるイベントが続いていってくれることを願います。



患者さんでごったがえす小児病院の受付の様子。

### クラブ活動紹介

## 部活動紹介 第5回 スキー部

西医体上位入賞者多数!

今年度で創部54年を迎えるスキー部は、現在部員数35名で活動しています。

12月は基礎を中心に初滑り合宿・年末合宿を行います。1月からは競技を意識して、荘川高原スキー場でポールを張って、3月に行われる東海医体・西医体に向けて練習しています。また、部活動以外でも空いている日は積極的に滑り、昨年度は、東海医体2位、西医体7位と見事入賞することができました。

今年度もさらなる飛躍を目指し頑張ってくださいますのでご声援の程どうかよろしくお願いたします。

スキー部 部長 M3 上原 有貴



年末の合宿で。この開放感がたまりません。部員のはほとんどは初心者なのだそうです。

## 西医体※陸上5000m・3000m障害 優勝!

M5 荒木 孝さん (※西日本医科学生総合体育大会 8/1~8/12)

おめでとう!

Q: 前回3位だった際に、「来年は必ず優勝します!」と宣言された通りになりましたね。

1年間どんな思いで練習を?

A. 前は直前に40℃以上の高熱が続き、体力初期化…今回は1人で沖縄に行くという事もあり、OB先生方を始め、応援してくれる方々の期待に応える為にも、優勝しかないと思っていました。

Q: 陸上歴は? 普段の練習はいつどこで?

A. 中一からです。火・木・土は実習後に川澄から名大までジョギングし、名大の皆と練習。他の日は、山崎川沿い等を走ります。雨の日はトレ室。毎日15~30kmラン、毎朝筋トレ、毎晩ストレッチは欠かしていませんでした。

Q: 今後の目標また、目指す医師像は?

A. 昨年は22レースに出場し、12月末に引退したので、今後は、今まで培った体力・メンタルを糧に、頭で皆を追いかけようと思います。また、陸上部のように、そこに自分を磨ける場があれば、1人でも飛び込んで、常に上を目指して走り続けたいです。

Q: 文武両道を続ける後輩、これから医学部を志す方へ一言。

A. 勉強が忙しくても、学生のうちに自分のやりたい事にどんどんチャレンジして欲しい。今年は、陸上以外では、小児糖尿病サマーキャンプ名市大学生部会のリーダーを務めたりと充実した1年でした。頑張った分、きっと何か大切なものを手に入れるはず。僕の場合は仲間でした。結果なんてただのオマケ、純粋に皆と走るのが最高に楽しかったです!



西医体 表彰式。2位以下に大差をつけての優勝でした。



練習を続けてきた仲間と。

### 小児から成人までの泌尿器科医療 — 邁進する先天異常治療チーム —

私たち名市大泌尿器科学教室では、腫瘍、尿路結石、不妊、排尿機能、先天異常、宇宙医学を研究のテーマとして各チームが協力し合いながら研究・臨床に勤めています。

腎尿路・生殖器の先天異常を持つ患児に対する手術治療は、欧米で今大きな転換期を迎えています。腹部を切開する従来の開放手術から、こどもたちに優しい侵襲の少ない内視鏡（腹腔鏡）手術への移行です。私たちのチームでは、アジア諸国に先駆けて小島祥敬講師が2008年から2009年まで米国ペンシルバニア大学フィラデルフィア小児病院に臨床留学し、研鑽した技術で小児腹腔鏡手術をスタートしました。膀胱尿管逆流症防止術を現在名市大病院で先進医療として着手しました。さらに腹腔内精巣、水腎症、陰囊水腫、無機能腎などに対しても腹部を大きく切らない腹腔鏡手術を行っています。東海地方の小児科の先生方から泌尿器科疾患を患うたくさんのおこどもたちを紹介いただいております、毎月約20症例の手術治療を行っています。



水腎症の女兒の腹腔鏡手術を行う  
小島祥敬講師(左)と水野健太郎医師



尿道下裂の男児の再建手術を行う林祐太郎准教授(左)と丸山哲史医師

小児泌尿器科手術は癌の手術と違って臓器を摘出する手術ではなく、将来の良好な腎機能、生殖機能、性機能、排尿機能を保持するための臓器温存形成手術・再建手術です。繊細な技術を要する手術のため、私(林)は1998年から1999年まで米国UCLAメディカルセンターに臨床留学して技術を磨いてきました。尿道下裂という疾患のため正常な排尿ができなかった男の子が、手術後に友だちと一緒にうれしそうに排尿をしている姿を見るにつけ、名市大病院で医療に携わることができる幸せを感じています。

これからも努力を怠らないよう頑張りたいと思います。皆様にはどうか今後ご指導宜しくお願い申し上げます。

(文責:腎・泌尿器科学分野 准教授 林 祐太郎)

### 集中治療部 — 病院総力の投入による高度医療の実現 —

名古屋市立大学病院集中治療部は、昭和44年に創設された歴史ある施設のひとつです。開設当初から麻酔科医師が主体となり運営してきましたが、現在、ベッドは10床、スタッフは部長(兼務)、副部長、助教の3名、看護師55名で運用しています。大手術後、病棟・救急外来からの重症患者など幅広く対応しています。特徴的として小児心臓術後や小児救急症例が多く、小児集中治療を専門とする医師も在籍し、小児専門病院に匹敵する高い医療水準を維持していると思っています。集中治療は一見派手に見えますが、循環、呼吸、中枢神経、肝・腎臓、代謝・栄養などへの基本的管理の積重ねが救命率を上げると考えています。なかでも、呼吸管理と栄養療法については、最先端の研究と治療を行っている施設のひとつです。

集中治療は特にチーム力が求められます。各科医師・薬剤師・理学療法士・管理栄養士・事務との協力体制、放射線科医師との画像診断カンファレンス、看護師や臨床工学技師とのカンファレンスなどを行っており、今後も部門の枠を超えた集学的治療を供給していきます。

(文責:集中治療部 祖父江 和哉 部長)



前列左から、深田師長、藤原主任、鈴木主任、丸谷主任  
後列左から、伊藤副部長、祖父江部長、水落医師



### 地域貢献・地域活動



### 文部科学省 社会人学び直しニーズ対応教育推進プログラム

#### 「名市大 医療・保健学びなおし講座」好評開講中!

育児、介護等のために離職された医師・看護師などを対象とした本格的な再教育プログラムを2008年12月より実施・展開しています。1科目15コマで構成された本格的な系統プログラムを週5科目(月～金)休まず開講しています。これまでの延べ受講者数は475名(受講修了証発行数)にのぼり、復職希望者のみならず多くの現役医療従事者も受講されています。受講生の真剣なまなざしと熱気に刺激され、講師の先生方もとてもよい刺激を受けているとのこと。是非ご関心のある方は受講してみてください。2010年4月期からは、受講者からご要望の多い臨床医学科目に加え、今求められている医療人材像について病院長にご紹介頂くシリーズ講義「病院管理者の求める人材」など、多岐にわたった高度なプログラムを提供していきます。なお、新規募集期間は、2月22日～3月19日です。詳しくはホームページをご覧ください。



名市大 学びなおし

検索

### 麻酔・危機管理医学分野 祖父江和哉教授が三好町立中学校で講演!



三好町立中学校での講演風景

1948年12月10日第3回国連総会において「世界人権宣言」が採択されました。日本も12月4日から10日を「人権週間」と定めて、人権意識の普及を図っています。三好町では、毎年町立中学校(4校)において人権講演会を行っているとのこと。今年度は麻酔・危機管理医学分野の祖父江和哉教授が依頼を受け、『医者から見たいのちとは』をテーマに講演をしました。「テレビドラマとは違い、本物の救急・集中治療の現場では助からない命も少なくないのです。医療現場の風を感じることで、若い人たちが少しでも限りある命について考えてくれれば成功です。」と祖父江教授。名市大の医師が病院を離れ、市民の方々へ様々な形で貢献することも大学の重要な任務です。講演の最後に「名市大医学部の宣伝」もしっかりしてきたのだとか。祖父江教授の講演を聞いた三好町の中学生のなかから、数年後に優秀な医学生が生まれることを期待しましょう!

※平成22年1月4日、三好町はみよし市に市制施行しました。

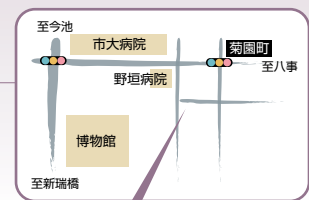
### 桜山の懐かしのお店紹介—第6回「カドヤ」さん

病院南側の通りを渡った路地沿いにカドヤはある。大学職員御用達との噂を聞きつけ、あの娘を誘って12時前に足を運んだ。20席ほどであろうか、それほど広くない店内はお昼休みを迎えた医師や地元で働く方々であっという間にいっぱいになった。注文したのは、日替わりサービスランチ(680円)とからあげ定食(880円)。5分程で運ばれてきたのはボリューム満点、おかずの種類も豊富な「ザ・定食」であった。二人で白身魚のフライと唐揚げをぺろりと平らげ、大満足のお昼である。店内には一週間のランチの予定が張り出されており、気に入ったメニューの日に来店するのもよし!今回紹介した定食の他にも、めん類、ご飯類、一品料理など合わせて50種類以上のメニューがあるので、平日のお昼(11-14時)もしくは夕方(17-19時半)に出かけてみては?



ボリューム満点の日替わりランチ!

(文責:大学院博士課程 澤田 雅人)



### 女性の健康広場 in 名古屋 (日時:2010年3月7日(日) 13:00開場 14:00-16:00 場所:テレビアホール)

問い合わせ

日本産科婦人科学会ホームページ (<http://www.jsog.or.jp/>)  
日本産婦人科医会ホームページ (<http://www.jaog.or.jp/>)

参加応募方法  
(<http://www.drug-sugi.co.jp/>)

3月3日のお雛様を含む一週間は女性の健康週間です(日本産科婦人科学会、厚生労働省)。名古屋市立大学産婦人科も女性の健康週間in Nagoyaのイベントを毎年開催しています。みなさんは子どもに恵まれない人が15%存在することをご存知ですか。20代前半では不妊症は6%、40代前半では64%というScienceの有名な論文があります。先進国の女性たちはキャリアのために出産を先送りし、気がつくともう妊娠能力を失っています。「40歳になると子どもができなくなるなんて、誰も教えてくれなかった」と患者さんは後悔します。不妊症だけでなく、流産、妊娠高血圧症候群、難産、妊婦死亡、あらゆる異常妊娠が加齢とともに増加しますが、当の女性たちはまったく知りません。高校の教科書には計画妊娠という言葉は書いてありますが、不妊症については書いてありません。

2009年は「いつか子供をもちたいあなたへ」というテーマでリリーフランキーさんとトークショーを行いました(写真)。第3回目の今年は3月7日曜日14時からテレビアホールで「妊娠適齢期」や「子宮がんワクチン」と「婚活」の講座を開催します。「婚活」に興味のある方、奮ってご参加ください。実は、みんなが妊娠適齢期に出産してくれると我々の仕事が減って、産婦人科医師不足対策になるんですね。

(産科婦人科教授 杉浦真弓)



昨年はリリーさん(右)とお話させていただきました。

### 名古屋市立大学大学院地域医療学寄附講座と名古屋大学大学院地域医療教育学寄附講座の開講合同記念式典が開催されました。

愛知県、名古屋市および財団法人愛知県市町村振興協会のご支援により設立された名古屋大学大学院地域医療教育学寄附講座と名古屋市立大学大学院地域医療学寄附講座の開講合同記念式典が、平成21年11月19日名古屋大学医学部附属病院講堂に於いて盛大に開催されました。まず、本学の戸苅 創病院長が開会の辞を、続いて名古屋大学の濱口道成総長と本学の西野仁雄理事長が祝辞を述べられました。感謝状贈呈の後、愛知県知事、名古屋市長、愛知県市町村振興協会理事長よりご挨拶をいただきました。寄附講座の今後の活動に関しては、名古屋大学は祖父江 元医学研究科長、名古屋市立大学は白井智之医学研究科長により詳細に紹介されました。そして名古屋大学の松尾清一病院長により閉会の辞が述べられました。両寄附講座が、愛知県の地域医療の活性化に貢献できることを祈念するとともに、皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

(地域医療学 大原弘隆)



祝辞を述べる  
西野仁雄理事長

式典には愛知県の地域医療関係者が集まりました



### 平成21年度ご寄附をいただいた方々

「市立大学振興基金(医学振興)」に、ご理解・ご賛同を賜り、誠にありがとうございます。平成21年度も多数の方々からご寄附をいただきました。お寄せいただいた寄附金は、教育・研究の推進に活用させていただきます。(順不同)

中根清二様 伊東憲二様 武正正樹様 平松誠治様 伊藤博之様  
野木村宏様 石川勝彦様 味間憲治様 神永整治様 望月衛様  
水野昌彦様 原田高良様 荒川啓基様 白神哲夫様 川久保己代子様  
北折洋太郎様 森哲三様 武仲頼義様 大野義幸様 河辺正己様

広報誌：瑞 医(ずい)  
発行：名古屋市立大学大学院医学研究科・医学部  
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1  
TEL (052) 853-8077 FAX (052) 842-0863

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp>

※次号の発行は平成22年6月下旬発行予定です。[年3回 2月・6月・10月]

☐☐  
我こそは  
通信員!

広報誌「瑞 医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、[igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp](mailto:igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp) または医学部事務室 広報担当まで